

「チーム三浦市」の勝利に向けて

プロ野球が開幕します。野球好きの私にとっては、待ちに待ったシーズンの到来です。選手達は、この日を目指して、オフシーズン、キャンプを通じてつらい練習に耐え自分自身を鍛えて、約7ヵ月間に及ぶシーズンをチームの勝利を目指し戦っていくことになります。

地方自治体に、オフシーズン、オンシーズンの区分けは存在しませんが、開幕という話であれば、それは年度初めの4月1日になるでしょう。私はこの日を迎えるため、財政課の職員として、1年の1/3にあたる約4ヶ月に及ぶ予算編成作業に従事してきました。

昨年11月に発表した「三浦市緊急緊縮財政宣言(脱・イエローカード)」(詳細は三浦市ホームページ



<http://www.city.miura.kanagawa.jp/zaisei/21yellowcard.html>を参照ください)に基づき、将来的な財政健全化のため職員一丸となって取り組んだ予算で、この3月の市議会で承認されれば開幕を迎えることができます。

「予算」は、①地方公共団体の事務・事業の執行計画、②その執行に要する経費の財源調達計画、③「①」の事務・事業ごとの経費の支出計画の「三つ」の計画を一体にした計画になっています。

限られた財源の中でこの計画を策定することは、すべての地方公共団体の財政担当をはじめ各部署においても、毎年度、頭を悩ます問題であります。事業の良し悪しを考え、費用に対する効果を見極め、取捨選択をしていく過程は、ストブリーグそのものです。廃止される事業、新たに実施される事業、そういった事業の新陳代謝の中で、切磋琢磨し、チームを作り上げていかなければなりません。

チームの監督とも言える市長は、マニフェストで住民に約束した政策、総合計画の実施計画や住民要望などに目を配って、緊急性、必要性などの観点から優先度を判断します。

そうして出来上がった予算は、開幕を待って執行されることとなります。予算の編成過程は非常に重要ですが、その適正な執行により、初めて価値のあるものになるのです。



予算至上主義として「住民の負担する税金等を財源にして行われる地方公共団体の仕事が、最小の経費で最大の効果を上げることができるかどうかは、予算の編成いかににかかっている」などと言われますが、予算編成は、まだまだ自主トレーニングとキャンプの段階で、目指すべきものは、あくまで勝利、つまり、市民が安心して暮らしていけるまちづくりの実現なのです。

それは、市役所だけでなく、市民だけでもない「チーム三浦市」としての勝利でなければなりません。市全体で勝利の喜びを実感できるよう今シーズン(平成22年度)の戦いに挑んでいきたいと思えます。

(財政課 石渡 隆行)

暴論オピニオン 35

三浦市政策経営課では、行政経営全般について日頃から様々な無責任放談をしています。このコーナーではその放談の中で飛び出した暴論をご紹介します。両手を挙げて賛成できないまでも発想のヒントくらいにはなるでしょう。

人の振り見て我が振り直せ

少し前になるが、みなさんはこんなダイワハウスのCMを覚えているだろうか。

ダイワマンという着ぐるみを見ながら役所広司が、監督にダイワマンとダイワハウスとの間にどんな関係があるのかを真剣に問う。それに対して、監督がこう言うのであ

る「関係、あるわけないよ、役所君」。

監督の心情を分析すると、「関係だって？あるわけないだろう。関係が無ければいけないの？仮にあったとしてもそんなことを説明する必要はないよ。余計なことを考えないで、黙って着ぐるみを着ていればいいんだ」簡単に言うとこんな心情ではないだろうか。

そんな分析をしつつ、私はこの CM を見るたびに笑っていた。笑う理由は次のようなものである。「こういう、監督みたいな人いるよな。自分も何かの説明を求めた時に、こんな風に関き直られた時があった」というようなことや、逆に自分が説明に窮してしまい、「もう決まったことですから」などと開き直ってしまった。このような状況を思いだして笑うのである。もちろん、後者を思い出した時は苦笑いではあるが。

筆者は、このような監督の行為を簡単に言うと、「極めて高圧的になされる説明責任の放棄」と言うことができると考える。そして、「極めて高圧的になされる説明責任の放棄」は、当然のことながら、した側よりもされた側のほうに極めて強い不快感が残る。

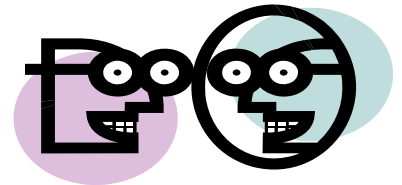
直接的に関係のない部外者として、はたからみている分には、「ひどいことするな。少しくらい説明してあげても良いのに」という感想程度で済むだろう。しかし、実際にこのような行為をされた当事者となれば、それでは済まない。「説明責任という責任を果たしていないのにもかか



わらず、何で高圧的になっているのだ」と憤るのがごく一般的な感情ではないだろうか。

自戒の念も込めて言うが、職員のみなさん、市民からの質問などに対してこのような行為をしてはいないだろうか？

筆者は、このような行為は、お役所仕事と言われる中でも典型的な悪い例だと考える。市民に対する説明責任の必要性は言われて久しく、その認識は社会的にも浸透しており、当市の職員も丁寧な説明を心がけているとは思っている。



しかし、市民からそう見えているであろうか。職員の態度が高圧的に感じられたり、説明を尽くしていないと感じられてはいないであろうか。

自らの行為が、この CM における監督のようになっていないか。人の振り見て我が振り直そうではないか。

「ぼっこすこせえる」とは・・・神奈川県三浦市には三崎弁と呼ばれる方言があります。「ぼっこす」は「ぶち壊す」の意味、「こせえる」は「こしらえる」という意味です。つまり、「ぼっこすこせえる」は「ぶち壊し、こしらえる」=スクラップ&ビルドという意味になります。

次号(第45号)は4月15日発行です。



3S市長の経営視点

三浦市長の吉田ひでおです。昨年に続き、あいにくの雨となってしまいましたが、3月7日に第28回三浦国際市民マラソンを開催しました。

三浦国際市民マラソンは、日本で唯一のホノルルマラソン姉妹レースであり、この開催に合わせて、ホノルルマラソン協会の方々が毎年三浦市にお越しくださいます。

今年は、ホノルルマラソン協会事務局長のジャネット・チャンさんがお越しになり、市議会で記念スピーチをしていただき、「ホノルル市と三浦市との間にはマラソンを通じて強いパートナーシップが築かれている」と、大変嬉しいお話をいただきました。

ホノルルマラソンは、アロハスピリッツ溢れる地元スタッフの励ましやサポートが魅力のひとつとなっています。同様に、三浦国際市民マラソンにおいても、姉妹レースの名に相応しい、もてなしの心溢れる大会を目指しています。

スタッフを始めとする市民の皆様による大会運営により、雨による寒さを吹き飛ばし、「あったかい」大会にしたいという想いが、言葉の壁を越え、通じたのだと思います。これからもこのような想いを胸に、良い交流を育んでいきたいと思ひます。